統語意味論によるアマリの分析

言語学・応用言語学専門分野
1LT13161G
2013(平成 25)年入学
山之口浩平

2017(平成 29)年 1 月提出

要旨

本論文では、話者の基準を越えたことを表すアマリを用いた「アマリの P」と「P のアマリ」の構文におけるアマリの機能について考察を行った。大口(2013)は、アマリが他の語彙項目 P と Merge することで「P の度合いが話者の基準値を越える」という意味を持つとした。本論文では、大口(2013)の観察と分析を、上山(2015)の統語意味論の手法を用いて再解釈し、大口(2013)では説明が不十分だった現象も統一的に説明できる新しい分析を提案した。結果として、「アマリの P」の構文において P が degree property を持つ場合、アマリ自体は scale を持たず、「P の度合いが基準値を越えるほど甚だしい」という解釈になるのに対して、P が degree property を持たない場合はアマリが「話者が持つ基準値を越えてひどい状態」という負の方向性の scale を持つ解釈になると主張した。

目次

1. はじめに 1
1.1. 大口(2013) 1
1.2. 問題提起 2
1.3. 理論的前提 4
1.4. 本論文の主張 5
2. 「アマリの P」の分析 7
2.1. 現象の観察 7
2.2. degree property を持つ語との Merge 7
2.3. degree property を持たない語との Merge 8
2.4. 「アマリの P」の分析のまとめ 10
3. 「P のアマリ」の分析 11
3.1. 現象の観察 11
3.2. degree property を持つ語との Merge 11
3.3. degree property を持たない語との Merge 13
3.4. 「P のアマリ」の分析のまとめ 13
4. その他の先行研究と本論文の比較 15
4.1. 服部(1993) 15
4.2. 兼行(2012) 16
5. 結論 19

1. はじめに

1.1. 大口(2013)

大口(2013)は、アマリという語の内在的な意味は何かという問いに対して、上山(2013)で述べられている統語意味論の手法を用いて、アマリの意味を明確に区別し、構造的に分析を行っている。そして大口(2013)ではアマリには(1)で示すように、大きく 2 つの機能があることが主張されている。[1]

(1) a. 「何かの度合いが話者の目安値を上回っている」という状態を表すアマリ
b. 「何かの度合いが手に余る域に達した」という出来事を指示するアマリ
[大口 2013: 1 要旨(2)]

第一に(1a)で示されている「何かの度合いが話者の目安値を上回っている」という状態を表す機能については(2)のような「アマリの P」の構文で観察することができる。

(2) a. あまりの楽しさに、時間を忘れた。
b. あまりの恐怖に、身震いした。
c. あまりの忙しさに、めまいがした。 [大口 2013: 28 (103)]

大口(2013)では「アマリノ P ニ、…」の構文におけるアマリは全て(1a)の「何かの度合いが話者の目安値を上回っている」という状態を表すアマリとして分析すると全てが上手く説明できるとしている。アマリと Merge する語 P が度合いを持つ場合について、アマリは「P の度合いが話者の目安値を越え、それが基準値を大きく上回っている」という状態を表すとしている。

そしてアマリと Merge する語 P が度合いを持っていない場合については(3)の例文をもとに考える。

(3) あまりの理由にあきれた。 [大口 2013: 29 (108)]

「理由」という語は(2)の例文で示したような「楽しさ」、「恐怖」、「忙しさ」といったような度合いを示す語とは異なり、その語自体は度合いを持たない。この場合、(3)の文全

[1] 大口(2013)では、上山(2013)の統語意味論の手法によって、(1a)のアマリを p 型のアマリ、(1b)のアマリを o 型のアマリと規定した。また p 型のアマリの SR 式は[( )=あまり]$_{U1}$、o 型のアマリの SR 式は e2 [類: あまり; Theme:]と表すことができるとして、現象の分析を行っている。

体意味に着目して考えると、「理由」自体は度合いではないものの、文全体を見ると、その「理由」の長さ、分かりにくさ、酷さ等に言及していることがわかる。つまり、大口(2013)では、(1a)のアマリが度合いを持っていない語 P と Merge する場合は、「その語がどのような度合いであるか」という情報が補われ、「P の何らかの度合いが話者の基準値を越え、それが基準値を大きく上回っている」という状態を表すとしている。

そして(1b)で示されている「何かの度合いが手に余る域に達した」という出来事を指示する機能については「P のアマリ」の構文で観察することができる。

(4) a. 楽しさのあまり、時間を忘れた。
b. 恐怖のあまり、身震いした。
c. 忙しさのあまり、めまいがした。 [大口 2013: 34 (132)]

一見アマリと P を入れ替えただけのように見えるが、「アマリノ P ニ、...」では容認可能なものが、「P ノアマリ、...」では容認できない場合があるということが、これらの構文の大きな特徴である。

(5) a. あまりの楽しさに、時間を忘れた。
b. 楽しさのあまり、時間を忘れた。 [大口 2013: 34 (133)]

(6) a. あまりの理由に、あきれた。
b. *理由のあまり、あきれた。 [大口 2013: 34 (136)]

「理由」は前述のとおり度合いを持たない語である。(1b)のアマリと度合いを持っていない語が Merge すると不適格な文になる。これは「何かの度合いが話者の基準値を越えた」という出来事を指示するため、Merge する語 P が一方向の度合いを持つことが求められると考えられるからである。

このように大口(2013)では上山(2013)による統語意味論の手法を用いて、文の意味と構造に着目し、2 種類のアマリの機能を規定することでより詳しく現象の分析を行っている。

1.2. 問題提起

大口(2013)によると、アマリという語は(7)、(8)のように、他の語 P と Merge することで「P の度合いが話者の基準値を越えている状態」を表すとされている。特に「アマリの P」の構文では「P の度合いが話者の基準値を越えるほど甚だしい状態」、「P のアマリ」の構文では「P の度合いが話者の基準値を越えること」を表すとされる。

(7) a. あまりの嬉しさに飛び上がって喜んだ。
b. 嬉しさのあまり飛び上がって喜んだ。

(8) a. あまりの悲しさに寝込んでしまった。
b. 悲しさのあまり寝込んでしまった。

アマリという語は P と Merge することで「P の度合いが話者の基準値を越える」という意味になるとされている。つまり P は何かしらの度合いを持つことが求められると考えることができるが、現象を観察してみると、前述のとおり必ずしも P 自体が何かしらの度合いを持つとは限らない例があることがわかる。

(9) あまりの言葉に私はショックを受けた。

(10) あまりの仕打ちにやるせない気持ちになった。

(9)と(10)の例文において、アマリと Merge している P は「言葉」と「仕打ち」であるが、これらは「嬉しさ」や「悲しさ」などと異なってそれ自体に度合いを持つ語ではない。この場合、大口(2013)によれば、P が度合いを持たない場合には文全体の意味解釈を踏まえて適宜度合いを補って解釈する。

しかし、必ずしも文全体の意味解釈を考えなくても、「アマリ」と P だけでも解釈は可能である。(9)の「あまりの言葉」という部分のアマリの解釈を考えると、「P の度合いが話者の基準値を越える」というよりも、アマリそのものに何かしらのネガティブな意味が備わっていると考えるべきである。(11)はアマリと度合いを持つ P が Merge する例であるが、前述した(9)と(10)のアマリとは異なるアマリの解釈になる。

(11) あまりの親切さに、この人ほんとうに学長なのか、といぶかったくらいです。
[『石の扉』 加治将一 2004]

この場合は「親切さ」の度合いが「話者の基準値を越えるほど甚だしい」といった意味解釈になる。しかし、(9)や(10)の例文で用いられているアマリは(11)で用いられている「話者の基準値を越えるほど程度が甚だしい」ということを表すアマリというよりも(12)の例に挙げている「アンマリ」の用法に近いものではないかと考える。

(12) あんまりな薫の言い草に、朱緒は怒るのを通り越して呆れてしまった。
[『夢見る乙女じゃいられない』 綾乃なつき 1998]

(12)の例文において「アンマリ」は「度が過ぎてひどい状態」というネガティブなイメージを表している。このように、アマリを「P の度合いを補って話者の基準値を越える」と解釈するのでなく、アマリ自体がネガティブなイメージを持ち、「アンマリ」に近い用法で用いられているといえる。

以上のことをふまえ、本論文では、大口(2013)における「アマリ」の統語意味論による分析を継承しつつ、上山(2015)をもとに「アマリ」という語の機能をより詳しく分析するとともに大口(2013)の問題点を解消することを目的としている。本論文では「アマリの P」と「P のアマリ」の構文において、アマリと P の性質を分析し、解釈にどのような影響があるかを調べる。

1.3. 理論的前提

本論文では上山(2015)による統語意味論の手法を用いて、構造と意味のつながりに着目してアマリの機能を分析する。

上山(2015)では、object(存在物)は指標と property(特性)の集合の対、property は attribute(項目名)と value(値)との対であるとされている。(13)は指標が x245 で表される object に関する記述を示す。

(13) a. <x245, {<u><attribute 1, value 1></u>, <u><attribute 2, value 2></u>, …}> [上山 2015: 9 (3)]
b. 二重下線部は property を表す。

また object の具体例を(14)に示す。

(14) a. <x19, {<Name, ジョン>, <Kind, 大学生>, <年齢, 20>, <身長, 181cm>, …}>
b. <x65, {<Name, 北京オリンピック>, <開催年, 2008 年>, <場所, 中国・北京>, …}>
c. <x923, {<Name, ○○海岸 OL 殺人事件>, <犯人, x19>, <被害者, x34>, <担当主任刑事, x337>, …}>
d. <x82, {<Kind, 落とした>, <落下物, x53>, <年齢, 20>, <行為者, x19>, <落下場所, …> …}> [上山 2015: 10 (4)]

また、本論文では degree property と relation property の 2 種類の property を主に用いて分析を行う。degree property とは、(14a)の<年齢, 20>や<身長, 181cm>のように、数値や度合いが value となっている property である。degree property の例を(15)に示す。

(15) a. <回数, 20 回>

b. <サイズ, 27 センチ>
c. <大きさ, 小さい>
d. <重さ, ___>

(15a)や(15b)のように具体的な数値を伴うものもあれば、(15c)のように具体的な数値を持たないものもある。また、(15c)の<大きさ, 小さい>のように value が特定されているものもあれば、(15d)のように value が特定されていない場合もある。そして(15d)の例のように、必ずしも value が特定されている必要はない。

relation property とは object が value になっている property のことである。これは object 同士の関連性を示すものであり、<Theme, ★>や<犯人, x3>、<落下物, x53>などが例として挙げられる。

1.4. 本論文の主張

本論文では「アマリの P」と「P のアマリ」におけるアマリの持つ意味素性の違いに着目し、2 種類のアマリを規定する。1 つは「アマリの P」における「P の度合いが話者の基準値を越えて甚だしいさま、度が過ぎてひどいさま」を表す degree property を持つアマリ、もう 1 つは「P のアマリ」における「P の度合いが基準を越えていること」を表し、それによって別の出来事が引き起こされることを示す relation property を持つアマリである。

第一に、「アマリの P」における「P の度合いが話者の基準値を越えて甚だしいさま、度が過ぎてひどいさま」を表す degree property を持つアマリについて(16)のように規定する。

(16) degree property を持つアマリ
[{N}, <●, {<ひどさ, あまり>}>, あまり]

この場合のアマリは degree property である<ひどさ, あまり>を持つ。これは attribute に「ひどさ」というネガティブなイメージを持つ語を設定しており、value に「あまり」という「基準値を越える」という程度を表すように設定している。degree property を持つアマリは他の語 P と Merge することで「P の度合いが話者の基準値を越えて甚だしいさま、度が過ぎてひどいさま」といった解釈になる。アマリの scale が負の方向性を持つのは、attribute にネガティブなイメージを持つ「ひどさ」をもつからである。アマリの意味が負の方向性を持つことは、以下の例からも示される。

(17) a. あまり飲むと体に悪い。 [服部 1993: 12 (74)]
b. あまりの仕打ちに怒った。

(17)a)は「アマリの P」の構文ではないが、服部(1993)では過度であることを表すアマリは P が過度であることによって、望ましくない、不都合なことが生じることを表す場合に用いられると述べられている。このことは「アマリの P」の文においても一部適用されることが考えられる。

次に relation property を持つ「P の度合いが基準を越えていること」を表すアマリについて(18)のように規定する。

(18) relation property を持つアマリ

[{Z}, <x3, {<Kind, あまり>, <Theme, β(★)>}>, あまり]

この場合のアマリは relation property である<Theme, β(★)>を持ち、他の語 P と Merge することで「P の数量や度合いが基準を越えている」ことを表す。このアマリは他の語 P と Merge することで、P の数量や程度が基準を越えることで別のことが引き起こされることに焦点が当てられている。この場合、どの数量や程度が基準を越えているかということに言及する必要があるため、<Theme, β(★)>を持つ。

以下、具体的に説明する。2 章では「アマリの P」構文、3 章では「P のアマリ」構文に対する分析を提示する。そして 4 章では「アマリ」という語が先行研究ではどのような分析をされているかを提示し、本論文の主張と比較する。

2. 「アマリの P」の分析

この章では「アマリの P」構文の分析を行う。

2.1. 現象の観察

「アマリの P」におけるアマリを用いた例文を以下に提示する。

(19) a. あまりの気持ちよさに時間が経つのを忘れた。
b. あまりの悲しさに暫くは立ち直れなかった。
c. あまりの壮大さに息をのんだ。

(20) a. あまりの状況に私は目を背けた。
b. あまりの出来事に怒りが沸いてきた。

(19)の例文は degree property を持つアマリが degree property を持つ P と Merge する例を示している。(20)は degree property を持つアマリが degree property を持たない P と Merge する例を示している。このように、degree property を持つアマリは P が degree property を持つ場合、持たない場合の両方で文を構築することができる。

以下 2.2 節では degree property を持つアマリが degree property を持つ P と Merge する場合の分析を示す。そして 2.3 節では degree property を持つアマリが degree property を持たない P と Merge する場合の分析を示す。以下順に考察する。

2.2. degree property を持つ語との Merge

degree property を持つ語との Merge についての例文は(19)に提示している。ここでは(21)をもとに「アマリの P」におけるアマリが degree property を持つ語と Merge する場合を分析する。

(21) あまり $_{x1}$ の $_{x2}$ 楽しさ $_{x3}$ に、時間を忘れた。

x3 の「楽しさ」は「楽しい」という形容詞を名詞化したものであり、名詞であるが形容詞に近い性質を持つと考えられる。この場合、x3 は「楽しさ」が attribute として機能しており、何らかの度合いや程度を表す語を value として要求しているため、x3 は degree property である、<楽しさ, ___>を持つと考えられる。

以上のことを踏まえ、「あまり $_{x1}$ の $_{x2}$ 楽しさ $_{x3}$」の Numeration を(22)のように設定する。

(22)　Numeration= {x1, x2, x3}

a. <x1, [{N}, <●, {<ひどさ，あまり>}>，あまり]>

b. <x2, [{J, +N, +R, no}, ∅，の]>

c. <x3, [{N}, <●, {<楽しさ，___>}>，楽しさ]>

(22)をもとに、それぞれの意味がどの様に結びついていくかを考える。この文では、x3「楽しさ」が何に対する「楽しさ」なのか言及されていないため、ここでは x3「楽しさ」は zero-Merge し、x3 の指標●に x4 が追加される。次に x4「楽しさ」と、x2「の」と J-Merge した x1「あまり」が Merge する。これによって x1 の指標●に「楽しさ」の指標 x4 が追加される。以上を踏まえて、LF 意味表示を以下のように示す。

(23)　LF 意味表示

<x4, {<楽しさ，___>, <ひどさ，あまり>}>

ここで<ひどさ，あまり>は value が特定されていない degree property と結びついた際、value を補うように property を構築すると考える。(23)の LF 意味表示をみてみると、<楽しさ，___>の value は特定されていない。ここでは<ひどさ，あまり>の value である「あまり」が<楽しさ，___>の value を補い、<ひどさ，あまり>の attribute は削除される形で property を構築する。以上のことを踏まえると、意味表示は(24)のように示すことができる。

(24)　意味表示

{<x4, {<楽しさ，あまり>}>}

(24)をもとに分析を行う。x1「あまり」がもつ degree property の attribute であり、負の方向性の scale を持つ「ひどさ」が削除され、<楽しさ，あまり>のように整理される。これは x1「アマリ」が持つ scale ではなく、x3「楽しさ」が持つ scale が優先されていることを示す。「楽しさ」の scale が解釈に用いられることで、アマリの機能として「話者が持つ基準値を越えてひどい状態」という負の方向性を持つ scale としての解釈ではなく、「楽しさの度合いが話者の基準値を越えるほど甚だしい状態」であることを表すと考えることができる。

結果として(21)の文は「<u>楽しさの度合いが話者の基準値を越えた</u>ため時間を忘れた」という状況を表していると解釈できる。【(24)の解釈は下線部】

2.3. degree property を持たない語との Merge

degree property を持たない語との Merge についての例文は(20)に提示している。ここでは

(25)をもとに「アマリの P」におけるアマリが degree property を持たない語と Merge する場合を分析する。

(25)　　あまり$_{x1}$の$_{x2}$理由$_{x3}$に、言葉が出なかった。

この場合、x3 の「理由」はそれ自体に scale を持つ語ではなく、理由という事柄を示しているため、<Kind, 理由>を property として持つ object 記述表現であると言える。
以上のことを踏まえ、Numeration を(26)のように設定する。

(26)　Numeration= {x1, x2, x3}
　a. <x1, [{N}, <●, {<ひどさ, あまり>}>, あまり]>
　b. <x2, [{J, +N, +R, no}, ∅, の]>
　c. <x3, [{N}, <x3, {<Kind, 理由>}>, 理由]>

(26)をもとに、それぞれの意味がどの様に結びついていくかを考える。
ここでは x3「理由」と、x2 の「の」と J-Merge した x1「あまり」が Merge する。これによって x1 の指標●に「理由」の指標 x3 が追加される。
以上を踏まえて、LF 意味表示を(27)のように示す。

(27)　LF 意味表示
　　<x3, {<Kind, 理由>}>
　　<x3, {<ひどさ, あまり>}>

意味表示は(28)になる。

(28)　意味表示
　　{<x3, {<Kind, 理由>, <ひどさ, あまり>}>}

(28)をもとに意味解釈を考える。x1「あまり」の attribute であり、負の方向性を持った scale を表す「ひどさ」が残っており、「話者の基準値を越えるほどひどい」という負の方向性を持つ scale が解釈に用いられる。ここでは「話者の基準値を越えるほどひどい理由」ということを表している。「理由」という語自体は度合いを持たないため、「あまり」と Merge することによって「理由」に「度が過ぎてひどいさま」等の負の方向性を持った scale が付与されることになる。これは degree property を持つ語とアマリが Merge することで生じるアマリの副詞的解釈とは異なり、アマリが形容動詞的用法で用いられていると解釈す

ることができる。

結果として(25)の文は「理由が話者の基準値を越えるほどひどくて言葉が出なかった」という状況を表していると解釈できる。【(28)の解釈は下線部】

「アマリの P」の構文において degree property を持たない P と degree property を持つアマリが Merge する場合の現象を観察すると、「話者の基準値を越えるほどひどい状態」という解釈を自然に行うことができる。

(29) あまりの言いがかりに腹を立てた。

(30) あまりの態度に、私は言葉を失った。

2.4.「アマリの P」の分析のまとめ

ここまで degree property を持つアマリが、degree property を持つ語と Merge する場合と、degree property を持たない語と Merge する場合を分析した。degree property を持つ語と Merge する場合は<P, ___>と<ひどさ, あまり>が結びつき、<P, あまり>という property を構築し、「P の度合いが話者の基準値を越えるほど甚だしい」という意味解釈になる。これに対して degree property を持たない語 P と Merge する場合は、アマリが「度が過ぎてひどいさま」という負の方向性を持った scale 持つ解釈になると考えられる。

以下に degree property を持つアマリの機能をまとめる。

(31) degree property を持つアマリ
[{N}, <●, {<ひどさ, あまり>}>, あまり]

(32) degree property を持つアマリは「話者が持つ基準値を越えるほど度が過ぎてひどい状態」を表す。この時、アマリが持つ scale は負の方向性を持つ。

(33) a. P が degree property を持つ場合、アマリが持つ「話者が持つ基準値を越えるほど度が過ぎてひどい状態」という負の方向性の scale ではなく P の scale が優先され、アマリは「話者の基準値を越えるほど甚だしい」という解釈になる。

b. P が degree property を持たない場合、アマリは「話者が持つ基準値を越えるほどひどい」という負の方向性の scale を持つ。

3. 「P のアマリ」の分析

この章では「P のアマリ」構文の分析を行う。

3.1. 現象の観察

「P のアマリ」におけるアマリを用いた例文を以下に提示する。

(34) a. 驚きのあまり$_{x1}$、彼はベンチから転げ落ちた。
b. 嬉しさのあまり$_{x1}$、お互いに抱き合って喜んだ。
c. 苛立ちのあまり$_{x1}$声を荒げた。
d. 慎重さのあまり$_{x1}$、大きなチャンスを逃してしまった。
e. 証言を聞く限りじゃ家族を失った悲しみのあまり$_{x1}$って感じでもなさそうだ。

(34)の例文は relation property を持つアマリが degree property を持つ P と Merge する例を示している。relation property を持つアマリは degree property を持つアマリとは異なり、degree property を持たない P と Merge しない。このように、relation property を持つアマリは P が degree property を持つ場合のみ観察でき、持たない場合は容認度が著しく下がることが観察できる。

3.2 節では relation property を持つアマリが degree property を持つ P と Merge する場合を分析する。そして 3.3 節では relation property を持つアマリが degree property を持たない P と Merge する場合の分析を提示し、なぜ relation property を持つアマリが degree property を持たない P と Merge する場合に容認度が下がるのかを考察する。順に考察していく。

3.2. degree property を持つ語との Merge

degree property を持つ語との Merge についての例文は(34)に提示している。ここでは(35)をもとに「アマリの P」におけるアマリが degree property を持つ語と Merge する場合を分析する。

(35) 楽しさ$_{x1}$の$_{x2}$あまり$_{x3}$、時間を忘れた。

この場合、x1 の「楽しさ」は<楽しさ, ___>を持つと考える。x3「あまり」は「P の数量や度合いが基準を越えている」ことを表しているため、<Kind, あまり>と relation property である<Theme, β(★)>を持つアマリとして考える。

以上のことを踏まえ、Numeration を(36)のように設定する。

(36) Numeration= {x1, x2, x3}

a. <x1, [{N}, <●, {<楽しさ, ___>}> 楽しさ]>

b. <x2, [{J, +N, +R, no}, ∅, の]>

c. <x3, [{Z}, <x3, {<Kind, あまり>, <Theme, β(★)>}>, あまり]>

(36)をもとに、それぞれの意味がどの様に結びついていくかを考える。この文では、x1「楽しさ」が何に対する「楽しさ」なのか言及されていない。ここでは x1「楽しさ」は zero-Merge し、x1 の指標●に x4 が追加される。次に x4「楽しさ」と、x2「の」と J-Merge した x1「あまり」が Merge する。これによって、x3「あまり」が持つ<Theme, β(★)>の解釈不可能素性★に x4 が組み込まれ、解釈不可能素性は削除される。

以上を踏まえて、LF 意味表示を(37)のように示す。

(37) LF 意味表示

<x3, {<Kind, あまり>, <Theme, β(x4)>

<x4, {<楽しさ, ___>}>

意味表示は(38)になる。

(38) 意味表示

{<x3, {<Kind, あまり>, <Theme, β(x4)>

<x4, {<楽しさ, ___>}>}

(38)をもとに意味解釈を考えると、「楽しさ $_{x1}$ の $_{x2}$ あまり $_{x3}$」は「楽しさが話者の基準を越えた結果、別のことが引き起こされている」という意味になる。話者の基準を越えたことよりも、その結果他の出来事が引き起こされたことに焦点が置かれている。

結果として(35)の文は「楽しさの度合いが話者の基準値を越えることによって時間を忘れた」という状況を表していると解釈できる。【(35)の解釈は下線部】

relation property が「何かの度合いが基準値を越えた」ことを表すために要求する scale は、一方向に方向性を持ったものであるため、両方向に scale を持つ語(年齢、成績、サイズ等)が P となる場合は、P の scale がどちらの方向の基準を越えたことになるのか解釈できないため、不適格な文になってしまう。

(39) a. 高齢のあまり驚いた。

b. *年齢のあまり驚いた。

3.3. degree property を持たない語との Merge

(40)　　*理由$_{x1}$の$_{x2}$あまり$_{x3}$、言葉が出なかった。

「理由のあまり」の場合、x1「理由」は、「理由」という object を示しており、<Kind, 理由>を property として持つ object 記述表現である。そして「理由」という語自体は度合いを持たない表現である。x3「あまり」は「P の数量や度合いが基準を越えている」ことを表しているため、<Kind, あまり>、<Theme, β(★)>を property として持つ語として考える。

以上のことを踏まえ、x1、x2、x3 を(41)のように設定する。

(41)　　Numeration= {x1, x2, x3}

a.　<x1, [{N}, <x1, {<Kind, 理由>}> 理由]>

b.　<x2, [{J, +N, +R, no}, ∅, の]>

c.　<x3, [{V}, <x3, {<Kind, あまり>, <Theme, β(★)>}>, あまり]>

ここで「理由」が「アマリ」と Merge する際、<Theme, β(★)>が要求する要素を「理由」が持たないため、解釈不可能素性が残り、不適格な文になる。

3.4.「P のアマリ」の分析のまとめ

「P のアマリ」の文は、「P の数量や度合いが基準を越えている」ことを表す relation property を持つアマリを規定することで説明できる。degree property を持つアマリとは異なり、解釈不可能素性を含み、これを削除するように Merge しなければ不適格な文になるため、P が degree property を持たない場合、そして degree property の attribute が両方向に方向性を持つ場合は不適格になる。つまり、degree property を持つアマリのように、アマリが attribute に負の方向性の scale を持つ「ひどさ」を持たず、P が degree property を持たない場合に不適格な文になるため「度が過ぎてひどい」という解釈はできないことになる。

以下に relation property を持つアマリの機能をまとめる。

(42)　　relation property を持つアマリ
[{Z}, <x3, {<Kind, あまり>, <Theme, β(★)>}>, あまり]

(43)　　relation property を持つアマリは「P の度合いが基準を越えていること」を表し、それによって別の出来事が引き起こされることを示す。

(44)　a.　どの数量や程度が基準を越えているかということに言及する必要があるため、解釈不

可能素性を含む<Theme, β(★)>を持つ。

b. 解釈不可能素性を削除するように Merge しなければ不適格な文になるため、P が degree property を持たない場合、そして degree property の attribute が両方向に方向性を持つ scale の場合は不適格になる。

4. その他の先行研究と本論文の比較

この章は、「アマリ」という語が先行研究ではどのような分析が行われているかということを提示し、本論文の主張と比較することで、「アマリ」という語の機能をより詳しく分析することを目的としている。

4.1. 服部(1993)

服部(1993)では、「アマリ」は否定語と呼応する副詞の「弱否定型のアマリ」と、何らかの程度を越えることを表す「過度型のアマリ」の 2 つの用法があると指摘している。

弱否定型のアマリについては以下の条件が定められている。

(45) 弱否定型のアマリ～ナイは、正方向とみなされる方向に向かっての程度が比較的大きくないことを表す。 [cf. 服部 1993: 9]

以下に「弱否定型のアマリ」の用例を示す。

(46) a. これは{そう・あまり}大きくない。 [服部 1993: 6 (29)]
b. これは{**そう・?あまり**}小さくない。 [服部 1993: 7 (30)]

(47) a. この問題は｛そう・あまり｝難しくない。
b. この問題は｛そう・あまり｝易しくない。 [服部 1993: 7 (37) (38)]

(47)の「難しい」と「易しい」の両方が容認される理由として、「難度」という観点から考えると「難しい」は正方向、そして「易しい」は本来負方向であるがその負方向の尺度が望ましさと結びついているため、正方向として一時的に解釈することができるからとしている。

「過度型のアマリ」は、「アマリ P」がそれ自体、望ましいことではなく、P が過度であることによって、望ましくない、不都合なことが生じることを表す場合に用いられる。また「過度型のアマリ」について、「アマリ」は、同じ過度型である「アマリニ」や「アマリニモ」とも使用条件が異なっていることが示されている。

(48) a. あまり飲むと体に悪い。 [服部 1993: 12 (74)]
b. あまり上手で驚いた。 [服部 1993: 14 (101)]

(49) a. これは{?あまり・あまりにも・あまりに}美しい。

b. 何十個も食べた。｛?あまり・あまりに・あまりにも｝うまかった。
[服部 1993: 17 (119) (120)]

また、「過度型のアマリ」に対応する意味として「アマリの N」、「N のアマリ」、「N アマリ」について述べられている。

(50) a. N は述語の主体（通常人間ないしこれに準ずる活動主体）の性情を表すものに限られる。
b. N の度合が過度であることにより主体が通常と異なる行為や状態をとるに到ることを示す。実例では、人間の心的・感覚的状態や「過労」のような身体の状態を表すものが極めて多い。[服部 1993: 21]

その例を以下示す。

(51) a. （相手の）あまりの強さに驚いた。 [服部 1993: 21 (139)]
b. ?（相手の）強さのあまり驚いた。 [服部 1993: 21 (140)]

服部(1993)では弱否定型のアマリと過度型のアマリの用法があるとし、「アマリの P」は過度型のアマリであるとした。P は述語の主体の性情を表すものに限られ、過度型のアマリは P の度合が過度であることにより主体が通常と異なる行為や状態をとるに到ることを示すと主張されている。本論文において、「アマリの P」の文における P は主体の性情に限らないこと(言葉、理由、状況、こと、言いがかり等)、そして過度型の「アマリの P」が「P の度合いが話者の基準値を越えるほど甚だしい」と「話者の基準値を越えるほどひどい」という 2 つの解釈と機能を規定している点で、より多くの現象を説明できる。

4.2. 兼行(2012)

兼行(2012)では、「あまりの X に」と「X のあまり」の二つの構文をもとに「アマリ」の性質や特徴を考察している。「あまりの X に」に関して(52)のように考察をしている。

(52) a. 「あまりの X」の文は基本的に容認可能である。
b. 「あまりの X に Y」について、プラスの原因の X にはプラスの結果の Y、マイナスの原因の X にはマイナスの結果の Y になる。
c. X は Y の時点で過去の事象であっても良い。
d. 「あまりの X に Y」は、文中で意味的に X が強調され注目されるのに対し、「X のあまり Y」は文中で意味的に Y のほうが注目される結果となる。

[兼行 2012: 3 (6), (8)]

以下に(52)ついての例文を示す。

(53) a. あまりの飛行機の大きさに甥が喜んでいた。
b. 飛行機のあまりの大きさに甥が喜んでいた。
c. *あまりの飛行機に甥が喜んでいた。 [兼行 2012: 7 (20)]

(53a)と(53b)では飛行機の「大きさ」というプラスの意味の方向性を表している。それに対して(53c)は飛行機の特徴を示す表現がないため方向性を持たない。(53c)は飛行機のどのような特徴の極端さに言及しているかが解釈できずに容認度が低くなると考えられる。

(54) a. あまりの状況に混乱した。
b. *あまりの状況に順調さを感じた。
c. *あまりの状況にとても嬉しくなった。 [兼行 2012: 10 (34)]

(54)のように、「あまりの状況」という場合、「状況」はマイナスの意味の方向性で解釈される。(54b)と(54c)のように Y に当たる部分においてプラスの解釈を想定させるように後半の句を変えると容認度が低くなる。これは、前述のとおり、「あまりの状況に」というXに当たる部分がマイナスの解釈を想定させるためYにあたる部分がマイナスの解釈である(54a)では容認可能となるのに対し、(54c)のようにYにあたる部分にプラスの解釈がつくと違和感が生じ、容認度が下がると考えられる。

次に「X のあまり Y」についての条件を示す。

(55) a. 「X のあまり Y」について、X の過度な感情、状態により起こる話者自身でも意外な結果としての Y により、Y はマイナスの結果になる。
b. 「X のあまり Y」は、X に起因して我慢ができずに Y してしまったというような、衝動性があり、冷静な判断を欠いた状態を表す。意外性や驚きも内包する。
c. X はその時、瞬間的なもので、Y と同時性があるため、過去ではない。
d. 話者の主観的な程度の強さとして「あまりの X」＜「X のあまり」になる。
[兼行 2012: 3 (7)]

以下に(55)の例を示す。

(56)　会いたさのあまり震えた。　[兼行 2012: 24 (96)]

(57)　犬が雷の恐怖のあまり震えていた。　[兼行 2012: 25 (111)]

(58)　*成績のあまり二度見した。　[兼行 2012: 26 (115)]

「X のあまり」で、感情や衝動性を伴わない状態が容認不可能になるのは、X に程度の方向性が指定されていないからであり、X の程度としての極端さ、意外さがわかりづらいためである。(58)の「成績」はこの文脈からでは「良い成績」か「悪い成績」かの判断ができない。さらに話者の感情、感覚、評価、判断も含まれていない中立的で客観的な状態でるため、過度さを X が表すことができない。このようなことから聞き手は X の意外性、極端さが解釈できずに不自然な意味解釈になってしまうため、(58)の例文は容認できないと推察できる。

兼行(2012)では、「アマリの P」と「P のアマリ」の文において、P とアマリを入れ替えても意味が通じるものと、「アマリの P」では意味が通じるが「P のアマリ」になると容認度が下がる例について詳しく分析している。しかし兼行(2012)による説明は P が度合いを持つかどうかということとそれに伴うアマリの解釈に言及がない。本論文では、意味と構造からアマリの機能を分析することに焦点を当てている。

5. 結論

本論文では「アマリの P」と「P のアマリ」の構文におけるアマリと P を分析した。第一に、Lexicon には 2 種類のアマリがあることを規定した。(59)には degree property を持つアマリについて、(60)には relation property を持つアマリについてそれぞれ示す。

(59) a. 「P の度合いが話者の基準値を越えて甚だしいさま、度が過ぎてひどいさま」を表す degree property を持つアマリ

b. [{N}, <●, {<ひどさ, あまり>}>, あまり]

(60) a. 「P の度合いが基準を越えていること」を表し、それによって別の出来事が引き起こされることを示す relation property を持つアマリ

b. [{Z}, <x3, {<Kind, あまり>, <Theme, β(★)>}>, あまり]

特に(59a)の degree property を持つアマリは Merge する語 P が degree property を持つかどうかということでアマリの解釈が変わることを示した。(59a)の degree property を持つアマリの解釈とその分析について(61)に示す。

(61) a. P が degree property を持つ場合、アマリが持つ「話者が持つ基準値を越えるほど度が過ぎてひどい状態」という負の方向性の scale ではなく P の scale が優先され、アマリは「話者の基準値を越えるほど甚だしい」という解釈になる。

b. P が degree property を持たない場合、アマリは「話者が持つ基準値を越えるほどひどい」という負の方向性の scale を持つ。

(59b)について、relation property を持つアマリは degree property を持つアマリとは異なり、Merge する語 P が degree property を持つ必要がある。

(62) a. どの数量や程度が基準を越えているかということに言及する必要があるため、解釈不可能素性を含む<Theme, β(★)>を持つ。

b. 解釈不可能素性を削除するように Merge しなければ不適格な文になるため、P が degree property を持たない場合、そして degree property の attribute が両方向に方向性を持つ scale の場合は不適格になる。

本論文では上山(2015)の統語意味論の手法を用いて分析を行った。「アマリの P」の構文において、P が degree property を持つ場合は、アマリ自体は scale を持たず、「P の度合い

が基準値を越えるほど甚だしい」という解釈になるのに対して、P が degree property を持たない場合はアマリが「話者が持つ基準値を越えてひどい状態」という負の方向性の scale を持つ解釈になることを示した。

本論文では「アマリの P」の文において、P が度合いを持たない場合はアマリが「話者が持つ基準値を越えてひどい状態」という負の方向性の scale を持つことを示しており、現象をより詳細に説明できる。

参照文献

服部匡(1993)「副詞「あまり (あんまり)」について—弱否定および過度を表す用法の分析—」『同志社女子大學學術研究年報』44(4): 451-477. 京都：同志社女子大學.

兼行裕(2012)「副詞的用法のアマリの意味制限」卒業論文 九州大学.

大口恵理(2013)「アマリの構造と解釈」, 修士論文, 九州大学.

上山あゆみ(2013)「構造と意味の対応とズレ:統語意味論の提案」『文学研究』第 110 輯, pp.93-106.

上山あゆみ(2015)「統語意味論」 名古屋：名古屋大学出版会.

謝辞

本論文を執筆するにあたり、主査教員になっていただいた上山あゆみ先生にはお忙しい中、丁寧なご指導をいただきました。先生には何度も面談をしていただき、自分の理解が十分でない部分について、ご指摘、ご指導をしていただき、卒論への理解を深めることができました。この場を借りて深く感謝の意を申し上げます。また副査教員となっていただいた久保智之先生、下地理則先生、太田真理先生には授業を通してさまざまな指導をしていただき、考えを深めることができました。深くお礼申し上げます。